

VetScan® products by
ABAXIS

VetCom

September / October 2009



株式会社 **セントラル** 科学貿易

ケーススタディ：ヨウム

VetScanによる診断が活かされたヨウム（African Grey Parrot）の症例

寄稿：Don Harris, DVM



ポイント・オブ・ケア（Point of Care ; POC）*アナライザーは、動物医療において欠かせない存在となってきた。これは、的確な診断と治療のため、即時に正確なデータが必要であるからだ。特にエキゾチックペットは、危篤状態で来院することが多く、POC は重要となる。

*監訳者注：POC とは、患者の検体を病院外に持ち出さずに現場で診断結果を出すこと。近年、ベッドサイド診断、ベッドサイド検査に代わってよく用いられる用語。POC アナライザーはそのための分析機器。

2008年6月3日、1羽のヨウム（5歳・オス）が他院からの紹介で来院した。紹介元の動物病院での暫定的な診断は腺胃拡張症（Proventricular Dilatation Disease）であった。そ嚢鬱滞を認め、X線写真で前胃の拡張（ただし、ガス充満はなし）が明白であったことが診断の根拠となっていた。そのほかの検査は行われていなかった。患鳥のヨウムが急速に弱ったため、紹介元の病院は、POCを備えた当院での検査を求めた。

診療の結果、私はこのヨウムに重篤な多飲多尿を認めた（これがそ嚢膨満の原因と思われる）。初診時のX線検査で異常は認めなかった。身体検査では、わずかな低体重（そ嚢充満で404g）、軽度の不活発、若干の“よろけ”を認め、そ嚢は水の滞留でかなり膨満していた。飼主の話では、少なくとも1日に1回、「大きな」水飲みボウルに水を補充しており、食欲もすさまじいように思われるとのことだった。この時点での私の鑑別診断リストの第一は、糖尿病あるいは腎不全だった。だが、確定的なデータが得られるまで、焦って結論に飛びつくのは危険だ。私はシンプルに適切な臨床検査を実施することをチョイスした。数分のうちに、このヨウムの臨床症状の理由を十中八九つまびらかにする、明瞭なデータが得られるPOCの存在を私は知っているからだ。私が実施する99.999999973%のケースと同様に、CBCと血液検査用の血液サンプルを採取した。結果は下表だ。

WBC	15,760	Chems	
Hets	88%	AST	1772
Lvmphs	12%	Bile Acids	35
PCV	34%	CK	装置の分析可能範囲を超過
wbc toxicity (白血球の中毒性変化)	0	UA	1.6
polychromasia (多染性)	2+	Glu	234
		Ca	8.7
		Phos	2.8
		K+	10.8
		Na+	138

この時点で、私の初期の推測は微塵に砕けた。尿酸値と血中グルコース値は、ともに完全にノーマルだったのだ。これほどの高カリウム血症を、私はこれまで鳥類の患畜で見たことがなかった。アジソン病という病名が頭をよぎったが、鳥類での前例は知らない。そこで、家畜におけるアジソン病治療の経験を持つ同僚の意見を聞いてみることにした。相談した同僚たちも皆、鳥類のアジソン病については経験がないということだった。文献を探したが報告例は見出せなかった。飼主に得られた同意は、鳥の治療と、暫定診断の確認のための治療反応を見ることであった。副腎生検も検討したが、技術的な難易度は高くないのだが、飼主は「診断的治療」を選択した。

Florinef (0.1mg/ml) *、0.2cc BID (.005mg/kg BID) の投与が開始された。プレドニゾンの使用も考慮したが、最初の対症療法は安全なアプローチでなければならないと判断された。飼主は、経済的な理由から自宅治療を希望し、(自宅は 3 時間かかる遠方だったが) 3~5 日ごとに経過観察のため、通院することになった。

*監訳者注：Florinef はアジソン病治療薬 (主成分 Fludrocortisone)

投与後 24 時間のうちに、患鳥は「気分がよさそう」になった。ぐったりした感じが少なくなり、よくしゃべるようになり、機敏になった。多飲傾向は減少したが完全消失にはいたらなかった。3 日目、私は飼主に Florinef を 0.3cc BID に増量するよう指示した。この増量で多飲症状はほとんど消失し、ヨウムは「完全に正常に見受けられる」状態になった。6 日目、経過観察のため再来院した。

経過観察での臨床検査の結果は、ほぼ完全に正常であった。K+ 4.7、AST 185、CK400、PCV は 34 から 42 に上昇していた。体重はそ嚢が空の状態 で 436g であった。

3 週間後、再度、経過観察のために来院した。この時点で臨床検査値はすべて正常範囲内であり、患鳥は飼主によれば「以前どおり」になっていた。6 ヶ月後の電話で、Florinef 投与を続けており体調は完璧に良好だという話であったが、検査に再来院することはなかった。

この症例における最大のポイントは、いかなる臨床症状に直面しても先入観を持たない“オープン・マインド”の必要性と、可及的速やかに精確な臨床検査データを取得することの重要性にある。疾病状態にある鳥の場合、治療に直接影響を及ぼす臨床データが判明するまでの1日2日を待つことがほとんどない。場合によっては、数分を争うこともある。多くの例が、臨床検査が終わるのを待たずに息を引き取ってしまうだろう。さらに悪いことに、臨床症状のみから判断した不適切な治療は、患鳥の病態悪化に拍車をかけかねない。

Abaxis VetScan VS2 Chemistry Analyzer は、鳥類の医療への神からの贈り物だ。ごく微量のサンプルでほとんどのデータが得られるこの装置は、きわめて小さな鳥にできえ、健康状態を診査するため、その理想を提供するものである。

監訳 小嶋 篤史(鳥と小動物の病院 リトル・バード)

米国 ABAXIS 社 発行「Vetcom 2009.9月/10月号」より